

## 下地・守永報告へのコメント

長久領 彦 （関西大学）

数理経済学会方法論部会、春季ジョイント・セミナー―「象徴」と「社会」  
批判―於大阪大学 2017/03/30

### 1. 下地報告に関して

1. ルソーの社会契約論: 今日我々が常識として考える民主主義の基本原則、主権在民、法の下での平等など、を打ち立てた記念碑的作品。  
下地報告では、主にこの本の前半部分（原理編）が再考されている。  
ルソーの考え:

自然状態	社会契約	社会状態	無政府状態	⇒	国家の設立
			暴力と服従	⇒	契約と合意
			自然的自由	⇒	市民的自由
			占有	⇒	所有

自然状態から社会状態への移行は歴史的過程として説明されているわけではない。一つの思考実験:なぜ国家が必要なのか?人々の無制限な自由(自然的自由)は制限を受けるべきなのか?等を説明する理論的装置。社会契約とは人々が自由かつ公正な条件の下で合意する契約のこと(ロールズの無知のベールでの社会契約などがその代表的例)

社会契約を通じて、それまでなかった権利や義務が新しく制定されたり(例:集会・結社の自由、表現の自由など。兵役・納税・教育の義務など)、これまで各自が所有していた財産等が権利として国家により所有権として保障され、守られることになる。

### 2. 社会契約を駆動させる原動力=一般意志(ルソーのキーワード)

一般意志とは何か?

個別意志(経済学でいう選好に近い:各自の持つ欲求・嗜好)や全体意志(社会全体ないしその一部の構成員全員が共有する欲求・嗜好)とは違う。

一般意志とは:「人間は一人では生きていけない。皆で協力して社会を作ろうよ。共同で生きていこうよ。」という意志のこと。この意志を社会構成員全てが共有する。当然そこでは自分勝手は許されない。自分の欲求や利益の追求は許されるけれども、それは他人の同様な欲求や利益を起こさないことが条件である。公共性への配慮を各自が自覚している。

ルソーの生きた時代:王政・貴族政が崩壊し、民主主義へと移行していた時代。フランス革命(1789)、アメリカ独立(1776)など。

政治を一部の人間に任せるのではなく、市民が担う。当然市民の側にその自覚がなければならない。

板垣退助(1837-1919):なぜ自由民権運動を?「幕末のとき、われら侍が尊王だ攘夷だ、と切り合いをしているときに、百姓や町民はわれ関せずとまるで他人事のように見ていた。これではいかんと思ひ…」一般意志を普及させるために彼は運動を起こした。

### 3. コメント

1. 仮に一般意志が成立したとしても、社会契約の結果、自由・平等・博愛、さらには経済的に豊かな社会を作れるかどうかは一層の考察を必要とする。これが社会的選択理論やメカニズムデザイン・マーケットデザインなどで扱っている問題。

…われわれは自由で自律的な個人が、相互の利益のための社会的協業を編成するにあたり、社会的活動の効率性と成果分配の公平性を保証するための「協力編成の構成原理」を尋ねようとする。換言すれば、経済システムの構造を設計者の観点から検討し、効率的かつ公正な社会的協力編成の設計可能性に関して論理的に思索することが、本書におけるわれわれの目標なのである(鈴木興太郎「経済計画理論」1982まえがきより抜粋)

結構これは難しい:アロウの不可能性定理、戦略操作の不可能性定理、リベラルパラドックスなど。

2. 昨今の政治状況=ポピュリズムの台頭(英国のEU離脱の国民投票、トランプ大統領の当選、アベノミクスなど)は一般意志の衰退と解釈できるのでは?

自分のことしか考えない人々が民主政治において愚かな選択をしている。愚かなの意味:結局自分たち自身が損をすることになるのにそのことが分かっていない・わかろうともしない。

民主主義をポピュリズムから守るには何が必要なのか?良識的考えを持つ人々の方が圧倒的に多い筈だが、政治は声の大きさに決まる。サイレントマジョリティの声を吸い上げる工夫が必要。

「民主主義社会で馬鹿でも生きれる世の中になった(人権の保障)。情報化社会になって馬鹿でも発言できる世の中になった(ヘイト・スピーチ、ネットでの暴力的発言)」

西谷 修 アメリカ 異形の制度空間 講談社(2016):自由民主主義の裏事情が語られている。ご一読を。

## 2. 守永報告に関して

### 1. 「ホワイトヘッドの象徴システム論」を読んだ感想.

ホワイトヘッド:数学・論理学から出発し,後に独自の形而上哲学に転身.

目的: 経験世界での認識をはじめから概念化された記号の体系で捉えるのではなく,身体と環境から得られる生の体験から直接生まれるものとして捉える(20世紀前半の哲学の課題:認識や相互了解の問題に対するアプローチの一つ? 分析哲学による言語分析,フッサールの現象学などにも共有される問題)

### 2. ホワイトヘッドの知覚に対する考え方:

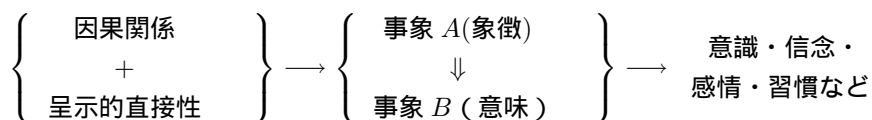
知覚の拠り所となる二つの因子.

1. 因果関係 外界から与えられる刺激(過去から現在,未来)
2. 呈示的直接性 感覚を通して直接体験できる対象の属性(現在)

(\* ) 事物は時の移ろいによって不断に変化している. ホワイトヘッドの自然観

(\* ) 我々は世界にあるモノについて直接知っているわけではなく,我々の感覚を通じたもの,すなわち呈示的直接性(感覚与件,センスデータともいう)を知覚している.

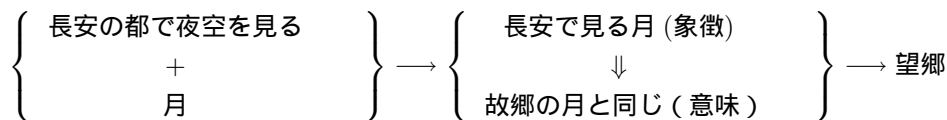
### 3. 象徴連関の働き方:



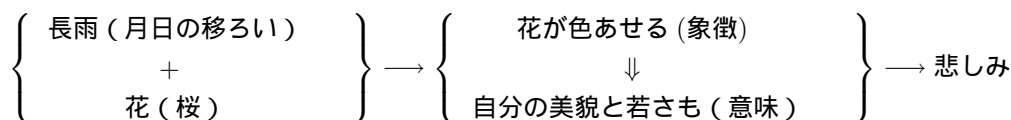
因果関係と呈示的直接性により知覚された事象 A (象徴) から別の事象 B (意味) を引き出し,それに対する評価(意識・信念・感情・習慣など)が生まれる.

### 4. 象徴連関の例 (百人一首から)

天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも (安倍仲磨)



花の色は移りにけりな いたづらに わが身世にふる ながめせしまに (小野小町)



芸術作品から多くの例ができるように、象徴連関は人間の感性に関する分析？ ホワイトヘッドは感性的存在としての人間をとらえたかった。象徴連関によって捉えられた意識・信念・感情・習慣の一部は概念化され、客観的・普遍的命題として確立する。科学的研究などはここに位置する。

## 5. 象徴連関と（数理）経済学:何を学ぶべきか。

### 1. 芸術と社会

芸術は自由な感性と解釈の多様性を歓迎する。それがないと芸術は死滅する。人それぞれの判断や意味付けがあってよい。象徴連関の手法は芸術・文化の分析には有効。

社会現象はどうか?:ルールや規則は全員がその趣旨を理解し、順守することを前提にしている。人それぞれが自由な解釈を持っていいというわけではない。象徴連関によってルールや制度が人に与える意味付けや評価がたとえ多様であっても、概念化される段階では客観的・普遍的妥当性を持たないといけない。この意味で象徴連関の手法は社会科学では限界がある。

### 2. 合理的選択の意味付け

この問題では象徴連関による説明を必要とせずショートカットが可能であると考えられる一方で、間違った象徴連関もどきの解釈を行っているのでは？

経済主体の行動:刺激に対する最適反応であり、主体は刺激を受けた際に意味を取り出すことはしない。

経済行動はほとんど動物の行動と同じであり、行動主義的手法で研究可能（実験経済学・行動経済学）。行動主義:サンクションとそれに対する反応で被検体の行動を理解しようとする立場、心理学などで一時はやった方法。

盛山和夫「制度論の構図」 経済学のこの種の行動主義的理解の仕方を批判。

例: 繰り返しゲームにおいて協調行動がみられる、規範に従った行動が観察できる（ゲーム理論の標準的見解）

盛山氏の批判:プレイヤーは長期の利益を考え合理的反応をしただけ。ゲームをプレイするうちに「協調」という観念（意味）をプレイヤーが持ったのではない（象徴関連ではない）。それはゲームを外側から見ている研究者が持ち込んだ解釈である。

事実として明らかになったこと:プレイヤーは利益があるからそう行動した。その行動は規範に従った場合と同じだった。

これだけから「プレイヤーは規範を『受け入れ』、規範に従った行動をした」とは言えない(盛山批判の要諦)

ゲームのプレイヤーに与えられた属性は欲求(選好)、選択肢(戦略)、情報(ゲームのルールと他のプレイヤーの属性)だけ。これだけの要素からどうして選択の「意味」を引き出すことができるのか(象徴連関もどき)。拙稿 規範の受諾:説論としてのゲーム理論(2004)早稲田政治経済学雑誌 357号も参照してください。

しかしやはり正義や秩序といった問題(下地報告など)を考える際は象徴連関の考えは参考になるのでは?

例: 市場における人間の利己的行動仮説に関して:

経済学の「何となくの」理解: 人間は利己的存在であるから、市場では利己的に行動するのだ。自然的事実として人間は利己的と想定している。また実験経済学などではこの事実を実証しようとしている。

私の理解:「市場においては人間は利己的に行動してよい」という了解が公共的に承認されている。人間が利己的は自然的事実ではない。事実としてあるのは「市場では利己的にふるまってよい」という社会的了解(社会契約?)の方である。これは A. スミスにおける道徳感情論と国富論の関係に関する研究から導かれた一つの見解でもある。

公共的承認のプロセスは、当然人々が選択行動からいかなる「意味」を引き出すかにかかっている(以上)